語学教育研究論叢第 25 号

海外日本語教育研修の準備
—受け入れ機関との交渉—

玉井　美穂子

Preparation for internship of Teaching Japanese in New Zealand and Australia

TAMAI Mihoko

It started in 1995 that students of the Japanese Section of Daito Bunka University went to foreign countries to practice skills of teaching Japanese to foreign students.

This article explained what we prepared the project. We visited the universities in New Zealand and Australia and asked them to accept our students as interns.

0．はじめに

日本語学科が開設されて１年目、海外の日本語教育の現場で学生達が日本語教育研修を受けるという学科のプロジェクトの実施に向けて準備が開始された。海外日本語研修は中国語圏と英語圏で行うことが予定されており、筆者は英語圏の担当となった。

日本語学科設立に際して提出された「ニュージーランド、オーストラリアにおける日本語教育の実態調査報告書」(1991 年 8 月)を手がかりに、ニュージーランド、オーストラリアの各教育機関を訪問し、担当の先生方にお目にかかっ

て、研修生を引き受けていただけるかどうか、引き受けていただけるとしてどのようなかたちで研修を行うことができるかを交渉することになった。（玉井2004）本稿はその交渉の過程を報告するものである。

1．海外日本語教育研修の意義

海外の教育機関で行う日本語教育研修とはどのような意義をもつものなのか。大学日本語教員養成課程研究協議会主催のシンポジウム「大学における日本語教員養成課程の現状と課題」(1991年11月24日開催)の資料に実習教育と進路と題して広島大学、文教大学の場合が報告されている。実習教育は国内と海外で実施されたとある。この報告からは次のようなことが読み取れる。国内にしても海外にしても受け入れ先をどのように選ぶか、が問題になる。実習生にとって学ぶことの多いカリキュラムを持った教育機関に受け入れてもらうことが望ましいが、受け入れる側にとっても労多くして益が少ないのでは実現不可能である。また、実現したとしても長続きしない。

先行の大学の海外教育実習の報告から示唆を得つつ、大東文化大学の日本語学科も海外日本語教育実習を行うべく準備をすすめたのである。日本語教育の学習は実技の学習を伴うはずである。実技の学習は「百聞は一見に如かず」で、具体的な現場に身を置くこと、現場を見ることにより百聞の理解を促進する。

日本語教育の現場は国内にもあるので国内での実習も有意義である。しかし、海外での実習は自ら異文化の中に身をおき、自国とは異なった環境で、それぞれの教育機関がどのような教育理念にもとづいて日本語教育を行っているかを体験するいい機会となる。自国の外での日本語教育と一口に言っても非漢字圏と漢字圏では教え方が異なる。ニュージーランドと中国とでは語学教育に対する考え方が異なる。学習者の文化や母語や学習目的によって教え方が異なる。同じ国の中でも担当の先生によって教え方が異なる。

そのような多様な日本語教育の現場で、渡航費用をかけてまで海外で実習を行うメリットはなにか。それは教室を一歩出れば外国語という環境の中で日本

語と日本文化を、そして学習者の言語や文化を考える経験をすることにある。文法や語彙や表現など言語をどのように教えるかに限らず、言語の背後にある自国文化と異文化について考える機会をもてることにある。海外での日本語教育実習をもうすこし範囲を広げた内容を持たせて海外日本語教育研修としたのはそのような理由による。

2．受け入れ機関の選択

「ニュージーランド、オーストラリアにおける日本語教育の実態調査報告」(以下「実態調査報告書」とする)では、ニュージーランドの10の教育機関とオーストラリアの2の教育機関の調査報告がなされている。これらの機関を全部訪問するのは時間的な制約もあり無理なので、いくつかの機関を選んで交渉することにした。また、リストにない教育機関の追加も検討した。

ちなみに「実態調査報告書」の調査対象教育機関を以下に示す。

（1）ニュージーランド

［1］ Victoria University of Wellington

［2］ Wellington High School

［3］ Hato Paola College

［4］ Massey University

［5］ NZ Center For Japanese Studies

［6］ Correspondence School

［7］ Christchurch Polytechnic

［8］ Canterbury University

［9］ University of Waikato

［10］ Auckland University

（2）オーストラリア

［11］ Griffith University

［12］ Melbourne University

上記のリストの中から機関を選び、また、他の情報や紹介なども加えて交渉することにしたところが下のリストである。日本語学科案内パンフレットとクロッシングを送り、手紙やファックスのやり取りを繰り返した。(メールは今ほど普及していなかった。)

(1) ニュージーランド

[1] Victoria University of Wellington

[2] Wellington Correspondence School

[3] Wellington High School

[4] University of Waikato

[5] University of Canterbury

[6] Christchurch Polytechnic

[7] Burnside High School

(2) オーストラリア

[8] Griffith University

[9] The University of Queensland

[10] The Australian National University

[11] Australian Catholic University New South Wales

3. 訪問日程 (1993年8月)

日程表

月	日	時間	発着地	交通機関	訪問先
8	2日	18:00	成田 出	JL-773	
	3日	07:15	オークランド着		Auckland University (見学のみ)
	4日	09:00	オークランド発	バス	
		11:00	ハミルトン着		
	5日				University of Waikato
	6日	09:55	ハミルトン発	NZ-643	

	10:45	ウェリントン着	Victoria University of Wellington
7日		＊ Whitireia Community Polytechnic	
8日		＊ Wellington Nakano Education Society	
9日	09:45	ウェリントン発　NJ-411	
	10:30	ｸﾗｲｽﾄﾁｬｰﾁ着	University of Canterbury
		＊ Christchurch Polytechnic	
10日	11:40	ｸﾗｲｽﾄﾁｬｰﾁ発　NZ-001	
	15:00	ｸｲﾝｽﾞﾀｳﾝ着	
11日			
12日	12:10	ｸｲﾝｽﾞﾀｳﾝ発	
	18:25	ブリスベン着	
13日			Griffith University Nathan Campus
14日			The University of Queensland
15日	13:45	ブリスベン発　AN-133	
	16:50	キャンベラ着	
16日			The Australian National University
17日			Canberra University
18日	11:00	キャンベラ発　AN-643	
	11:45	シドニー着	
19日		＊ Australian Catholic University New South Wales	
20日	09:30	シドニー発　JL-772	
	18:00	成田　着	

（注：＊印は先生とお会いしたが、学校を訪問することはできなかった。）

海外に研修生受け入れの交渉に行くというような仕事は経験がなかった。初めてのことだった。仕事量の調節が出来ず、今この予定表を眺めただけでも目がまわりそうになる。とにかく夢中で取り組んだ。緊張の連続でオーストラリアに着いたころには疲労が蓄積し、ベッドから頭があがらなくなってしまった。

同行した関口伊都子先生にお世話になった。なんとか予定をこなし、帰国した。

4．日本語研修検討項目

訪問先の先生方と話し合う項目として、次のような調査用紙を用意した。

Ⅰ　教育機関の概要

1）研修機関名、2）住所、3）日本語担当教員の構成、

4）学年暦、5）授業時間数、6）クラスの種類、数、クラスの人数、

7）使用教材、8）学習者の背景(学習目的等)、9）その他

Ⅱ　研修について

1）受け入れ可能人数、2）期間、3）時期、4）宿舎、

5）送迎、6）見物、7）費用、8）付き添い、9）研修内容

a　授業参観、b　教材作成の手伝い、c　課外の会話の相手、d　教壇実修、

10）その他

訪問した教育機関の中で実際に研修を受け入れてくださったニュージーランドのワイカト大学の例をあげる。(‘Ⅱ　研修について’の項目)

1）受け入れ可能人数　5名まで

2）期間　3週間（研修)、1週間（旅行)

3）時期　7月20日から3週間広島大学の学生が来ている

大東文化大学もその時期がいいのではないか

4）a　宿舎　フラット、1週間150Nドル（部屋、食事）男女まざっている

b　日本語学習生の中からホームステイ先をさがす

5）送迎　費用を払って頼む

6）見物　研修生が計画する（1週間)

7）費用　文房具代など

8）案内　日本語学習生があたる

9）研修内容　研修カリキュラムを作成する。研修の記録をもらう

5．研修ができなかった機関の主な理由

1）すでに他大学の学生が来ていて余裕がない

2）学年暦が研修生の都合と合わない

3）教員の負担が大きい

4）研修生の危機管理の責任の所在が曖昧である

5）その他

6．　プログラム担当のありかた

大学の交換学生のプログラムにのせて学校間の協定として実行する方法も提案された。その場合、相手校のカリキュラムに日本語教育実習がないと目的に合った学習が出来ない。また英語力でトーフル何点というようなことが要求される可能性もある。とりあえず日本語学科と相手校の当該学科または学部間の話し合い合意でスタートすることにした。

7．1994年夏の訪問

最初の各教育機関への訪問に次いで1994年の夏に再び受け入れ交渉に出かけた。今度は受け入れ可能な機関に的を絞り、具体的な話を詰めることにした。オーストラリアでGriffith　University　Nathan Campus、International Centerの Manager、 Heather Tinsleyさん、Japanese Exchanges Coordinatorの 内山浩道先生にお会いした。また同じGriffith　University ではあるが Gold Coast Campusのほうの加藤英司先生にもお目にかかった。The University of Queenslandの永田由利子先生をお尋ねして、研修生の宿舎として適当な所を見てまわった。

ニュージーランドはこの年は行くことができず、The University of Waikatoの中山晶子先生と手紙等で連絡しあった。

そして1995年、3年生になった日本学科の一期生を第一回海外日本語教育研修生としてオーストラリアの Griffith University Gold Coast Campus と

The University of Queensland、ニュージーランドの The University of Waikato に送り出すことが出来たのである。

8．付記

実際の研修がどのように行われたかは、後に研修を終えた学生たちの書いた研修報告書に詳細が記されているので参照していただければ幸いである。またお世話になった先生方には心からお礼を申し上げる。

なお研修生派遣年度、派遣先、派遣人数を以下に記す。(筆者の担当した 2001 年度までで、つづきは次の機会にゆずる。)

1995 年度

ニュージーランド

The University of Waikato	4 名

オーストラリア

The University of Queensland	2 名
Griffith University Gold Coast Campus	3 名

1996 年度

中国

北京外国語大学	12 名

ニュージーランド

The University of Waikato	3 名

オーストラリア

The University of Queensland	2 名
Griffith University Gold Coast Campus	3 名
The University of New England	2 名

1997 年度

ニュージーランド

The University of Waikato　6名

オーストラリア

Griffith University Gold Coast Campus　1名

北米

Western Michigan University　1名

1998年度

ニュージーランド

The University of Waikato　4名

オーストラリア

Griffith University Gold Coast Campus　4名

北米

Western Michigan University　2名

台湾

国立政治大学　1名

1999年度

ニュージーランド

The University of Waikato　4名

中国

北京外国語大学　4名

2000年度

ニュージーランド

The University of Waikato　4名

中国

南開大学　3名

2001年度

ニュージーランド

The University of Waikato　　5名

中国

南開大学　　3名

以上

参考資料

「シンポジウム“大学における日本語教員養成課程の現状と課題”」
大学日本語教員養成課程研究協議会(1992、5月)

「海外日本語教育研修報告書（ニュージーランド、オーストラリア）1995,夏期」
大東文化大学外国語学部日本語学科(1996,3月)

「海外日本語教育研修報告書(北京外国語大学)　1996年度」
大東文化大学外国語学部日本語学科(1997,2月)

「海外日本語教育研修報告書(ニュージーランド、オーストラリア)　1996年度」
大東文化大学外国語学部日本語学科(1998,3月)

「海外日本語教育研修報告書(ニュージーランド、オーストラリア)　1997年度・1998年度」
大東文化大学外国語学部日本語学科(1999,3月)

「海外日本語教育研修報告書　1999年度・2000年度」
大東文化大学外国語学部日本語学科（2001,3月）

「海外日本語教育研修報告書　2001年度、国内日本語教育研修報告書　2001年度」
大東文化大学外国語学部日本語学科(2002,3月)

参考文献

玉井美穂子(2004)「海外日本語教育研修について」『語学教育研究論叢21号』大東文化大学語学教育研究所